The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	学習の社会的構築と対話性にかんする研究
Author(s)	若槻, 健
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44821
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【5】

氏　　名	若槻　健（わかつき　けん）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　18087　号
学位授与年月日	平成15年9月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科教育学専攻
学位論文名	**学習の社会的構築と対話性にかんする研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　菅井　勝雄 （副査） 教　授　近藤　博之　　助教授　志水　宏吉

論文内容の要旨

本論文には大きく二つの課題があった。

一つは「教室」に独特の学習のかたちを明らかにすることである。その学習のかたちは、事実としてあるのではなく、成員の社会的実践によって達成されたものである。教師と生徒たちの共犯によって、社会的に構築された学習のかたちである。

この一つめの課題に対して、第一章では、本論文の認識論的立場である社会的構築主義について述べた後、教育社会学及びその隣接領域からの教室へのまなざしを振り返るなかで、学習を社会的に構築されたものとして見るために留意しなければならないことを整理した。それは、1.学習のかたちを教師や生徒の属性に還元せずに、共同の実践により達成された過程として捉えること、2.学習の社会的関係と認知過程の両方を扱うこと、3.ミクロな相互作用過程へのマクロな社会構造の影響を考慮に入れることである。この作業により、教室を三重に社会的に構築された場としてみる視点を明確にした。三重に社会的に構築されるとはすなわち学習の（社会的）認知過程、学習の社会的関係、教室での学習と学校外の言説と間の相互作用である。それは従来の研究では、個別的に扱われてきた問題を包括的に検討することでもある。続いて第一章の後半では、心理学的な学習論の流れを追うなかで活動理論をとりあげ、活動理論によって学習論に従来教育社会学が扱ってきたような、メンバーの社会的関係や学習の文脈というものを含む道が開けることを示した。これによって単なる個人の認知過程だけではなく、社会文化的存在としての学習者の学習を捉えることができるわけである。

第二章では、第一章での視点をもとにして、ある公立中学校における学習の構築のされ方について記述・考察した。考察は三つの局面からなされた。すなわち、学習そのものの構築のされ方、教室における社会的関係、教室での学習と教室外の「声」（文化）との関係である。学校学習においては、生徒たちが様々なことを放棄し、教師に委ねていることが明らかにされると同時に、なぜそうなるのかや何が問題にされるのか、自分たちと生活とどんな関係があるのかといった学習内容の深い意味が不問にされるかたちで学習が構築されていることが明らかになった。さらには、教室における社会的関係として様々な意味で困難を抱えている（ように見える）「しんどい子」に注目し、彼らが「しんどい子」として手厚く教室に包み込まれ、授業に参加できる仕組みが作られている一方、そのために彼らは一方的に支援を必要とする「しんどい子」であらざるを得ないというジレンマを抱えていることを明らかにした。また、対象校が同和教育推進校であることが教室の構築のされ方にどのような影響を与えているのかを明らかにした。同校の

教育実践は学習と自己、仲間との関係を問い、教室を異化する可能性があったにもかかわらず、結果的に学習から生徒たちを遠ざけ、教師によって加工・認定済みの知識を受け取るという学習のかたちを補強していた。

以上のことを明らかにするなかで、教室の学習のかたちは、三重にモノローグを志向していることが同時に明確にされた。それは 1.学習の過程における「他者」の不在・教材の「他者性」の不在、2.学校外の「声」の不在、3.「しんどい子」がそれ以外の者でありうることの不可能性、というかたちであらわすことができる。学習がこのようなかたちになるのは、教室において単一の基準が優勢であり、それ以外の基準が存在しないかのように見えるからであり、教室では予め定められた知識が授受され、探究による新しい意味の生成が行われないからである。教室は静的でモノローグ的な場として構築されているのだ。

本論文の二つ目の課題は、一つ目の課題から明らかにされた学習のかたちに対して代替案を提案することであった。学習がモノローグ的に構築される背景には個人的な学習観があると見なし、学習の社会的な側面を掘り起こすことで学習を捉え直す作業である。すなわち、モノローグ的で、知識の授受の場として組織された教室の学習を、「他者」との〈交通〉のもとに再構築し、意味を生成する対話的空間とすることである。受け取るのではなく生み出すこと。そして生み出すことは私の内面からわき出るものではなく、他者との〈交通〉のなかから紡ぎ出されるものであった。

この二つ目の課題に対して、第三章では本来学習には「他者」との出会いが必然であると考え、その出会いの場に注目した学者たちの声に耳を傾けた。すなわちそれはバフチンであり、ヴィゴツキー（学派）であり、デューイである。三者それぞれが「他者」のいない静かなモノローグ的世界（観）に批判を加えていた。彼らの人間観・学習観を通して、第一章で取りあげた活動理論をより明確に意味づけた。

私たちは他者との関係の中に初めて存在することができる。私たちは誰かに言われたことをもとにして自分の言葉＝意味を生成する。さらには、生成された言葉は誰かに向けて発せられたものである。具体的な文脈をぬきにして、具体的な主体（私や私以外の人々）を抜きにして、抽象的に意味のやりとりをすることはあり得ないのだ。それにも関わらず、教室は抽象的な意味の受け渡しが可能であるかのように学習が構築されてきた。しかしそう見えるのはそこに意味の生成が起こっていないからであり、異なる「他者」同士としての主体が出会っていないからである。

こうしたモノローグ的な学習に代わり、“社会的なもの”として学習を捉え直し、意味づけることが必要である。単一の共同体内の静的なやりとりではなく、異なる共同体間の〈交通〉＝「対話的関係」により、意味の生成が起きる。「社会文化的な個人の主体性（agency）」、「対話」、「コンフリクト」、「意味生成」、「他者」、これらがみな一つながりのセットとしてある。人は社会文化的な主体的個人として現れなければ、「他者」ではないし、「対話的関係」に入ることもなく、「意味生成」も起こらない。対話的関係のなかでは一つの「声」が一方的に優勢であることはできず、多様な価値体系が併存する。異なる「他者」同士の「コンフリクト」のなかで新しい文脈が生み出され、共有されることが「意味生成」である。また、新しい意味が生成された時空には、新たなコンフリクトが見出されているはずであり、学習は拡張し続ける（＝活動理論）。

最後に、こうした学習の捉え直しの可能性を持つ実践としてサービス・ラーニングを取りあげた。学習がすなわちコミュニティへの貢献であるサービス・ラーニングでは、学習者であることと能動的なコミュニティの一員であることが同時に成立している。そこでは学習の意味が現実の社会と結びつき、明確な価値を持って立ちあらわれる。コミュニティを改善するために知恵を絞ることがすなわち学習なのである。そこでは、学習と生活が統合され、課題も自分（たち）自身のものとして取り組まれることになる。学習者のために作られ、相対的に閉じられた学校という場を超えて、子どもたちがコミュニティの責任ある一員として生きることがサービス・ラーニングの示すところとしてある。

学習は“社会的なもの”によって、世界を受け取ることから共に創ることへと捉え直すことができるのである。

論文審査の結果の要旨

本論文では、教育社会学から学習指導（学習論）を取り扱っている。

まず、これまでの教育社会学における教室の学習研究を歴史的にレビューし、近年の学習をめぐる社会的構築（構

成）主義の Gergen や活動理論（社会・文化的アプローチ）の Vygotsky およびバフチン言語理論などを駆使して、理論的・分析的枠組みを構築する。

その枠組みのもとで、エスノグラフィーの研究方法を用いて解放教育推進校である Y 中学の実践を追い、それを規格化されたモノローグとして位置づけ、対話（ダイアローグ）性への転換が主張され、展望がなされている。とくに、本論文の中心と見なせる実践の扱いの中で、「しんどい子という Y 中独自のカテゴリーが、モノローグ的な授業を、逆説的な形でより強化している」という事態の指摘が、本研究の主張なメリットの一つといえる。

また、心理学からの近年のアプローチでは、同様に学習の社会的構成主義などを用いて、いわばボトムアップ的に学習指導（学習論）を対象として、社会や文化に迫る研究が盛んである。

それに対して本論文のように、社会学から学習論にアプローチする研究は、あまり見受けられず貴重である。

両分野からのアプローチへの架橋として寄与しうるからである。研究方法などを含め洗練が必要と思われる箇所も見受けられなくはないが、それにもまして新たな課題への挑戦という革新性は高く評価しうる。

以上の理由から、本論文は博士（人間科学）の学位に充分値すると判定した。